

戦前神戸の百貨店

——元町デパートを中心として——

谷内正往

はじめに

戦前の百貨店については多くの研究蓄積⁽¹⁾があるが、第一に閉鎖・破たんした百貨店⁽²⁾についての詳細な研究はあまり見られない。一万坪（約三万三千³m²）以上の百貨店になると固定資本が大きくなり、創立資本を集めるのに難渋し、何とか開業したとしても、ひとたび集客に失敗するとすぐさま経営が行き詰る。表の華やかさに対して、裏では細心の計算が必要とされる。百貨店とはそのようなビジネスである。だからこそ百貨店は文化史的な面だけでなく経営史的な面においても興味深いといえるのである。

第二に百貨店の立地に着目した研究⁽³⁾も少ない。私は戦前大阪の百貨

店を調べて、乗降客の多い鉄道駅に百貨店が立地する動向を明らかにした⁽⁴⁾。ここでは、直営、共同経営、賃貸といった経営形態に関わらず、百貨店が集客の見込める阪急梅田駅（阪急百貨店）、心齋橋駅（そごう、大丸）、南海難波駅（高島屋）、大鉄阿倍野駅（大鉄百貨店）⁽⁵⁾、近鉄あべのハルカス本店）、京阪天満橋駅（京阪デパート）、大軌上本町駅（大軌百貨店）⁽⁶⁾、近鉄上本町店）に出店した事実を明らかにした。小売業が立地産業である限り、戦前の百貨店についても立地の重要性を強調しても良いのではないかと考える。

以上の点をふまえて、小稿では大正末、神戸元町に大規模百貨店を建設してわずか半年で破たんした元町デパートを取り上げたい。大正

期までは、神戸元町が有数の商業地だったので、白木屋、高島屋、そごう、大丸、三越が出張所や分店支店を出していた。そこへ、元町デパートが、地元小売商の主導により京都大阪の有名業者を集めて開業したのである。しかし、もともと寄合所帯で昔の勤工場（関西では勤商場）のようなものであったためか、ほどなく破たんした。その後は三越が乗り出して、三越神戸分店（後に支店）として再生する。同店は戦後も長く経営を続けた。

一・神戸の百貨店、三つの源流

『新修神戸市史』によると、（大正末年～昭和初期にかけて）神戸における百貨店成立の流れには三つあるという。⁸ 第一は勤商場からの転換である。まず一九〇八（明治四十一）年新開地にできた二階建ての勤商場がある。階下は映画館、階上は売場と食堂であった。一九二〇年には五階建てに増築され「博品館」となり、翌年「神戸デパート」となった。次に、一九二五年一〇月新開地の東側にある元町六丁目に鉄筋コンクリート六階建の元町デパートが開店した。しかし、寄合所帯の経営により（後に詳しく見ていくように）、わずか半年で破たんし、建物跡を三越が神戸分店として使用することになる。

第二は商業資本以外からの異業種参入である。一九二七年六月神戸新聞社が市民に安価な日用品を供給し、合わせて大衆娯楽の中心とするため、新開地に神戸市民会館をオープンさせた。しかし翌年二月に

は経営難に陥り閉店した。次に、一九三三年四月神港百貨店が開業したがこれも長続きしなかったという。異業種参入の失敗は一時的なブームに乗って安易な経営を行ったからと推測される。

第三は他都市に本店を置く百貨店の支店設立である。¹⁰ 一九二三年に白木屋神戸出張所が開店した。白木屋のエレベーターは当時としては珍しく、顧客が列をつくったという。次に、一九二六年七月（前述）元町デパート跡に入った三越である。鉄骨鉄筋コンクリート造地下一階地上六階建て、延床面積約九、二五七㎡の建物である。¹¹ 一九二七年には地下一階事務所をマーケットに変更している。¹² 同店は一九二八年支店に昇格し、一九三九年には増築計画に着手した。

このほか、一九二七年四月には神戸に古い伝統を持つ大丸が三宮神社前に進出した。鉄筋コンクリート造地下一階地上七階建て、延床面積六五〇〇㎡、さらに一九三六年一〇月には店舗周囲を買収拡大して増築工事をおこなった（総延床面積二万六八四㎡）。

最後にそごう（十合呉服店）は、呉服店時代から神戸（元町）に支店を置いていたが、元町東側の交通の発達をきっかけとして一九三三年一〇月三宮に進出した。もともと阪神が三宮まで地下で延伸する計画があり、その際ターミナル・ビルを新築すると知り、同ビルに入居したものである。ビルは地下二階地上七階建、延床面積一万一五五〇㎡で、うちそごうが一六一六四㎡を賃借した。

神戸では呉服系の百貨店が有名であったように、昭和初期には省線元町駅西側の三越、阪神三宮駅のそごう、そして元町と三宮の間南

側の大丸、合わせて三つの大百貨店が一般によく知られていた。

二、元町デパートの創立と経営上の問題

商業地としての元町

神戸は港湾都市として発展した。一八六七（慶応三）年の開港以来、一九〇一（明治三四）年頃にはメリケン波止場を中心に西は神戸から東は小野浜にいたる地域が栄えた。海岸一帯には、貿易、海運、銀行、保険などの商社が立ち並び、製鉄、造船、製糖、紡績、ゴム、マツチ、樟腦などの工業が起った。港と産業の発達は当然のごとく神戸の都市化をうながした。そこで神戸市の人口は一八八九年一三万四、七〇〇人から、一九〇一年には二十五万九、〇四〇人と約一〇年で約二倍に増加したのである。⁽¹³⁾

神戸の近代的な市街地は、旧生田区（現、中央区）の東南部と西南部を起点として発達した。東南部は、海岸通りの外人居留地をめぐる商業地として栄えた。神戸の異国情緒はここから生まれたのである。⁽¹⁴⁾

一方、西南部は、相生町に神戸駅、橋通りに兵庫県庁、湊川神社があり、その周辺には劇場、寄席、茶店などが立ち並び、官庁街、娯楽街として栄えた。しかし、その後県庁が現在の元町駅の山側に移ると、背後に官庁、前面に港と商社街をもつ元町が発展を始めた。そして、一八八七（明治二〇）年以降、元町一丁目から六丁目に至る通りが整備され、神戸市の新しい都心部となっていた。⁽¹⁵⁾

図1．神戸元町通商店街（1936年頃）



出所：狩野勝三編『経営』第5巻第7号、1936年7月、商店経営研究所、ページなし。

軒を並べている様子がわかる。

このような繁栄期の元町六丁目に元町デパートは誕生するのである。以下、その創立の様子を見ていきたい。

元町デパートの創立

元町デパートの創立者は井上彌太郎である。彼は新聞紙上で、創立趣旨の一端を概略次のように語っている。⁽¹⁶⁾「輓近時勢の声運に伴ひ文化生活を要望せるの聲漸次顯著なる時に當り、大貿易港たる我神戸市

以後、元町は大正昭和初期に至るまで商店街もきわめて進取の気性に富んでおり、誓文払い、スタンプ事業、鈴蘭灯の設置（大正末年）などを行い、毎年十一月の特売品販売では通りが人で埋まるほど活況を呈していたといふ。⁽¹⁶⁾ 図1は昭和初期の元町通商店街の写真である。⁽¹⁷⁾ 鈴蘭灯が設置され、各種商店が

に完備せる『デパートメントストア』の無きは實に遺憾にして之れが實現は市民渴望にして止ざる實情なり」という。すなわち神戸は「一般市民の購買力甚だ旺盛」で「海内外旅行者の発着地点」なのに適当な「商品陳列場」がない。つまりはデパートを市民が望んでいる。

そこで「理想的建物を築設し、別記組織¹⁹⁾を以つて孰れも權威ある巨商又は有数なる生産者より出品を請け、諸般の設備並に内容を充實し、合理的利潤主義に依り販賣」しようと考えた。特に「衣食料品其他一般日常生活上の必需品に對しては他に率先し之れを紹介する」こととで常に「文化の先駆者」になる。さらに「外国部及貿易部を設置」して国産品を陳列し、欧米各国の「化学及び美術工芸品並に見本品其他型録等を蒐集し」商取引に便宜を図ることで「我が邦に於ける海外貿易の発展に資せんとする」。関東大震災以降、神戸は「東洋方面に於ける一大貿易都市」となったので「事業の前途益々好望有利にして一面国家的有意義なりと信じて疑はざる所なり」という。

ここから、国内では一流の商品を扱い「文化の先駆者」になり、海外貿易の橋渡しも務めたいと考えていることがわかる。また関東大震災から二年経過した神戸の貿易港としての利点も考慮に入れている。

そもそも井上彌太郎はどのような人物なのだろう。詳細は不明であるが、『明治大正昭和神戸人名録』(一九二五(大正十四)年)によると、「井上彌太郎(元七ノ一三、所得税七五四)」とある。他に、元町デパートの株主を取り出すと、「井上保蔵(石鹼商、元七ノ一三、所

得税一九七、電話長元三六(2)、井上光掌(文具商、元七ノ一四、所得税一五六三、營業稅三六四、電話長元五八九)」とあり、支払税金額、電話からある程度大きな商売をやっていたものと推察される²¹⁾。戦後、当時を知る人たちの座談会では次のことく語られている²²⁾。

宮崎「三越の以前は元町デパートですか。」

片山「井上油店、井上家具店など、井上一家が作って、デパートといつても出店をいろいろ募集していました。私のところも借りて入りましたがね。」

ここから井上氏の同族が出資をして、テナント(賃貸)方式で入居者を募ったことがわかる。昔の勤商場方式で入店者を集めたのだから²³⁾。ただし、その趣旨はすでに見てきた通り、港神戸に、ハイカラで国内外に通用する大型デパートを建設することにあつた。

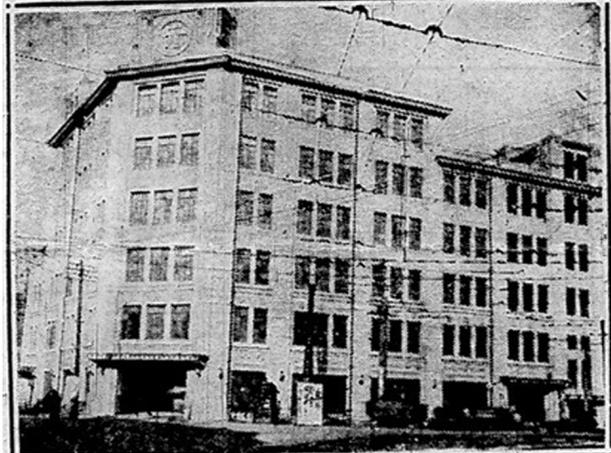
元町デパートは「百萬圓の資本金、百二十萬圓の工費を以て市内元町通六丁目宇治川のかど」に立地した²⁴⁾。一九二四(大正十三)年八月一日に起工し、翌年一〇月一六日に竣工し、一七日より營業を開始した。「同建物の総坪数は二千二百二十二坪餘で内營業坪数は五百三十一坪餘、すべての設備はいづれも近世式で昇降機の如き米国ウオーナーエレベーター会社製のもの四臺をすゑ、電気の照明設備あり、尚灯数二千五百個、燭力三千燭光を使用し、電話は局線六本、店内卓上三十個以上をすゑつけて居る」という²⁵⁾。図2は元町デパートの全景で

表1. 元町デパートの売場配置

1階	商品券、洋杖、靴、「レデーメート」銘茶、下駄、傘、メリヤス、雑貨、化粧品、レース刺繍品、和洋菓子、帽子、食料品、羅紗、毛布類
2階	呉服類一切、婚礼調度品
3階	文房具、額縁、玩具、糸、靴、旅行具、細紐袋物、足袋、肩掛け、洋傘、小間物、半纏、子供服、貴金属、時計、美粧室
4階	金物、刃物、錫器、敷物段通、陶器、漆器、風呂桶、花筵類、食料、油並に石油厨爐、和家具、洋家具、京堆木、藤製品、瓦斯会社製品
5階	美術部、食堂、文化人形、電気、ラヂオ、和洋楽器
6階	各種商品特賣品賣出、季節物
屋上	園藝、庭小禽、小動物
階下	元丸みやげ、玉子、普通塗物、鹽肉、臺所洋品、牛豚肉、鮮魚類、観物雑穀、小菓子、八百物一式、白米、鶏、鳥肉等

出所：『神戸又新日報』1925年10月12日付、第6面より作成。

図2. 元町デパート(1925年10月)



出所：『神戸又新日報』1925年10月17日付、第4面。

ある。営業の方針は「斯界における一流専門家生産者より直接産品の託送をつけ、総て統一経営をするので出品者の大多数は京都大阪問屋筋、それに一部の神戸商人」である。店舗配置は表1の通りであった。百貨店らしく多種多様な商品が並べられてお

十七日開業の元町デパートは「初もの食ひの神戸ツ子が湧き返る人氣の裡に開館以来、午前八時の開館時間から午後八時の閉鎖時間まで物凄い許り入場者が表玄関に殺到し、トても入場し切れず一日数回満員札を掲げる盛況を呈してゐた」。図3は二週間後の同じ新聞に掲載された元町デパートと大丸の広告である。元町デパートの広告は大丸よりも大きく、六階で「染織展覧会」「俳画展覧会」を開催し、屋上では余興として「吉原興行部七色會連中」が出演している。さらに、二階では銘仙の廉売が行われている。

図3. 元町デパート(右)と大丸(左)の新聞広告

出所：『神戸新聞』1925年10月31日付、第10面。

り、特に一階、四階、階下の商品種類が多いようである。しかし逆に二階の呉服類や婚礼調度品は簡単な記載ですませている。もともと同店が呉服店出身でないためであろうか。ともあれ、これら販売品の価格は、産地その他一般市場の相場を参考にして、常に市価以下の値段で提供する方針であった。⁽²⁶⁾

元町デパートは、非常に良いスタートを切ったのであるが、その半年後には破たんしてしまう。なぜだろう。原因をさぐる前に、半年後に神戸市内で開かれた「市内著名店舗店頭裝飾競技会」を見ておこう。元町デパートが他店と比べてどの程度の評価を受けていたか判明すると思うからである。

「市内著名店舗店頭裝飾競技会」は神戸又新日報社の主催で、一九二六（大正十五）年三月一八～二四日の一週間行われた。これは、甲種（一般投票）、乙種（専門大家審査）、丙種（神戸高商・関高商科・神戸高工の三校学生審査）の三種に区分されて実施された。⁽²⁸⁾ 甲種は新聞欄外刷り込み用紙か官製ハガキで投票したのだが、その結果は次のようであった。⁽²⁹⁾ 同紙では逐次投票結果を公表しており、⁽³⁰⁾ 最終日には「非常な人気を呼んだ」という。

地元で著名な商店（全三十一店）が参加しているので競争が激しいのだが、いざ投票になると最上位は一～二万通の得票で、その次が六千通、さらに一～二千通で上位十三店舗が占めている。元町デパートは八一八通で一六位である。同じ元町六丁目にある不二家食品店（一五、一四六通、第三位）に比べて、百貨店として多様な品ぞろえをする大型の小売店舗でありながら、これはかなり低い順位と言わざるを得ない。元町デパートはほどなく破たんに向かう。そこで、どのような経営上の問題があったのか確認しておきたい。これまで元町デパートがなぜ経営不振に陥ったのか、その事情を探った研究が管見の限り見当たらないからである。

表2．店頭裝飾競技会・一般の部（1926年3月18～24日、神戸又新日報社主催）

票数	所在地	店名	票数	所在地	店名
22,703	(1等)三宮町	大島呉服店	796	元町六	亀井堂本店
20,964	(2等)元町一	サイキ商店	792	元町三	マスヤ呉服店
15,146	(3等)元町六	不二屋食料品店	790	元町二	美津濃運動具店
6,297	元町三	柴崎洋傘店	790	元町六	マルヤ靴店
2,833	元町一	丸善代理部	777	元町一	大田鼈甲店
2,149	元町二	明治屋	756	元町四	瓦斯館
2,131	新開地	岡本萬年筆店	749	多聞五	和田金成堂
2,002	元町二	神戸屋靴店	748	元町四	片山洋服店
1,339	元町四	門阪屋	743	有馬道	吉田屋呉服店
1,305	北長狭三	鈴木陶器店	743	元町三	ほていや薬局
1,251	多聞八	かすみ屋	735	多聞四	よどや
1,110	相生四	正直屋時計店	734	元町五	アリノベ洋傘店
1,004	元町三	栄屋絵葉書店	706	新開地	花房百貨店
937	元町五	川上洋品店	685	元町五	船井食糧品店
854	元町四	イズミヤ時計店	671	元町五	阪部時計店
818	元町六	元町デパート			

出所：『神戸又新日報』1926年3月26日付、第5面を横書きに直した。

営業上の問題

当時の雑誌『商店界』は「神戸元町デパートメントストア失敗記」⁽⁴⁾として、かなり辛辣に同店の経営上の問題点をついている。冒頭で、オープンから一〜二週間過ぎた後の売り場を次のように描写している。

或る日、一人の洋服の紳士が二階の呉服部にブラリと現れた。

紳「名古屋帯の仕立てたのが欲しいのですが」

水色のセールスコートを着た女店員が此の客に対応して居った。

女「はい、どうぞ此方へ。是れに御座います」

指さす所を見ると、十本足らずの名古屋帯が重ねられてあつた。

紳「是れだけしないのですか」

女「はい、只今縫つてあるのは是丈でございます、併し柄を御撰

び下さいましたら、直ぐと御仕立致します」

紳「いや、今直二三本欲しいのです。会社の事務員に上げるので

すから、一七八才位から一七八才までのが欲しいのですが」

斯う云つた紳士の頭の中には、會つてある他の百貨店で毛斯の名古屋帯が、色彩の美しいのを競ぶが如くに、数十本陳列せられてあつたのを思ひ浮べて居った。

女「御仕立致しましたら如何でせうか」

紳「ちや、適當の生地を見せて下さい。」

やがて、十何分も待たされた紳士の前に現れたのは、これ亦僅か

に五六種の毛斯の生地であつた。此の貧弱さに紳士の顔には、ありありと失望の色が読まれた。

紳「仕立質と帯芯は幾ら程かゝるのでせうか」

女店員は之が即座に答へられなかつた。

女「は、一寸伺つて参ります」

又も幾分間を待たされねばならなかつた。そこへ余り愛嬌のない男の店員が算盤を持つて出て来た。

男店員「只今裁縫の係のものが参りますから、どうか暫く御待ち

願ひたう存じます」

紳士は又待たなければならなかつた。

ここから商品数が少ないこと、品揃えが悪いこと、布地を仕立てる係との連携がとれていないので値段がハッキリしないことなどが読み取れる。

さらに、同記事は開店後三ヶ月経つて「元町デパートメントストアは品が少なくて値が高い」という噂が出ているという。ある人が「此処の商品はちと値が高い様ですな」と言つと、店員が「左様で御座いますか、何分場代がお高いものですから」と答えた。ここに「場代とは、即ち神戸では家賃の事を意味する。詰り種種の商店が此の元町デパートと称する建築物に集つて、希望の場所を所定の間数に応じた場所借をして、井上氏と称する大家さんに家賃を拂つて店を出して居るのである。即ち昔の勸商場其の儘である。名はデパートメン

トストアであるが事実は奇合世帯である。借賃が高いから自然商品が安くないと云ふ事になつて」いるという。家賃が高くなつた理由として、同記事は次のように推測している。⁽³²⁾ 同店の「基礎工事に非常な金をかけた」ために「建築費が高くつき過ぎたと云ふ事が所有者たる井上氏に非常な重い負担になつたのである。そこで家賃が高くなり、従つて商品が高くなり、従つて経営が難しくなつたと云ふ事になつたのではあるまいか」。もしそうだとすると、当初から重い金銭的負担が生じていたことになる。

他にも、店員の商品知識が足りないこと、歴史がないので全体の統一感や主義方針が定まっていないこと、客層の絞り込みができていないこと、設備に問題があること、経営に人を得なかつたこと、事故による不幸など、⁽³³⁾ 厳しい指摘が続いている。

この中でも、客層の絞り込みについては、五階の陶器部が日本の名工の製品を陳列しており、それは高級専門店であつて百貨店ではない、と具体的に指摘している。

例へば六兵衛の八寸の水差しに七十圓の正札が附けられてあつたり、清風の五人前の飯食茶碗に八十圓の正札があつたり、香山の香爐が百二十圓、道八の菓子鉢が六十圓、竹泉の三ツ揃茶器が二十三圓等と云ふと流石の神戸人も、只驚くばかりであつた。安い所でも東山の三ツ重の湯呑が十二圓、蔵六の一輪差しが二十圓と云ふ有様で到底百貨店の陶器部ではなかつた。而も田舎者が一圓

ばかりの湯呑を買はふとしたが到頭見付からなかつた。一圓と云へば蓋付きの可なり上等の湯呑が買へる筈である。然し是れすら見出し得なかつた程此処の陶器部は高級而して専門的であつたのである。

その他、設備に関しては、当時まだ百貨店では一般的だつた「下足預かり」⁽³⁴⁾ を地下一階で行つてゐることが問題だという。すなわち、地階に降りる時の階段が変な形に曲がつており、しかも勾配が急で狭かつた。また、一階に梁（はり）が出ており「背の高い男は十人に一人、必ず其の梁で帽子を落とされた」という。

以上のことから、元町デパートは、第一に呉服類の品ぞろえが弱かつたのではないだろうか（表1の二階呉服類の品種の少なさ）。第二に、大型店舗の建設に費用がかかり、テナント（賃貸）料が高つてしまつた。第三に、客層の絞り込みが出来ていないために、テナント（賃借人）の選別も間違えてしまつたものと見られる。特に客層の絞り込みは基本中の基本で、客の愛顧を得られないとすべてがうまくいかなくなる。その意味において致命的であつたと言える。

ただ、ここから元町デパートの経営が稚拙であつたかというところとも言い切れない。なぜなら、兵庫県下では「神戸へ行くよりは、大阪へ行つて買つた方が安いと云ふ様な風潮」がまだ残つており、さらに元町商店街は専門化した中小小売店が激しくしのぎを削つており、「何でも一通りあるがロクなもの一つもないと云ふ様な店であつて

は、成り立っていかない所」だからである。「八、九萬足らずの人口のところ、東京銀座に次ぐ元町の商店街が形成されて居る」⁽³⁶⁾。競争が激しいのである。⁽³⁷⁾表2の店頭裝飾競技会に参加した小売店のうち元町の小売店は全体の三分の二を占めていた。こうしたことを考慮に入ると、結局元町デパートは「大型店」としては中小小売店との激しい競争に打ち勝つだけの経営が出来なかったと言わざるをえない。

元町デパートの後に入ってくる三越神戸分店の呉服売場主任は、神戸の顧客の難しさを次のように述べている。⁽³⁸⁾

なかなか商賣の的はつきりしないのが神戸である。
あんまりむきになつたり、焦つたりすると逃げられる。内心は焦つてゐても、悟られないやうにして、言い寄れたら上々である。謂はゞ気儘な、見たところ異国風ではあるが、田舎臭い無作法な、六ヶしいお嬢さんでもあるらしい。

人或は言ふ。東京風だと。
併し殆んど年中下駄を穿き、不調和に近い長い袖をひるがへし、つるつるてんに近い和服の着こなしのご婦人への方々——この姿態は實際神戸らしく微笑まれる匂ひである。東京の匂ひは微塵もない。

「六ヶしいお嬢さん」という表現に客層の絞り込みの難しさがよく

出ている。「人情の厚味は此処では望めない」⁽³⁹⁾、さらに、和服の着こなしは東京とも違っているという。

四、その後の元町デパート

三越神戸分店

元町デパートの後を受けて、三越神戸分店はどのような経営を行ったのだろうか。⁽⁴⁰⁾詳細は不明であるが、一九二六年七月の開業から業績は好調であった。図4は開業の新聞広告であるが、図3の広告とさほど変わりは無いように見える。実は開業の前月二八〜二九日の三日間で男子店員を総動員して、班を数十に分ち、神戸全市二〇万戸にもれなくお披露目の手ぬぐい二〇万本を配布したという。⁽⁴¹⁾

図4. 三越神戸店の新聞広告

三越の神戸分店
・七月六日開業・

本店業務
1 階 染織逸品展覧會
2 階 洋装部
3 階 和装部
4 階 呉服部
5 階 靴部
6 階 化粧品部

目下六通町元市戸神
店服呉越三
店分戸神

出所：『神戸又新日報』1926年7月5日付、第10面。

翌年一九二七年四月には地下一階をマーケットに変更し、五階食堂を拡張した。⁽⁴²⁾一九二八年六月には分店から支店に昇格した。その後大丸神戸店の増築を受けて、増築の計画を始め一九三九年十一月新館

(一、六七六坪(五、五六四㎡)を建設した。(百貨店法他の建築制限を受け当初予定の約四、五〇〇坪より大幅な削減となった)。(43) ことから外面的には順調に経営が進んでいたものと見られる。(44)

ただし、当初経営幹部は旧元町デパートを次のように見ていた。(45)

元町マーケット(デパート引用者、以下同じ)の建物を買収したから見て行つた方が好いと誰だつたか云つたので神戸に行つてその建物を見たが、非常に不潔で地下室などは簾の子を敷いたりしてあつてそれが水に濡れて不快な感じであつた、それを見てこんな汚たない建物がデパートになるのだらうかと思つたりした

そこでこの幹部は、従業員の士気を高めるために、次の方法をとつた。(46)

何しろ神戸三越の前身は元町マーケット(デパート)と云ふ極く低級な市場式経営のものであつたから、それを引継いだので當時店員の気持ちも低劣、萎縮してゐたのである、それで吾々はこれではいかんと支店長に進言して男店員の有志を募り、一人に付二十圓の旅費を補助して本店見学を奨励した、見事旅行から帰つた店員は東京にわれ等の三越本店が全市を壓する威容を以て日本橋頭に聳えてゐるのを目撃して急に自信が付き、精神的にも実際の行動にも見違へる程進歩して行つた

老舗百貨店の三越が、旧元町デパート見て種々苦勞をしたことが推察される。(47) なお、旧元町デパートの女子店員約四〇〇名は新規雇いの形式によりそのまま三越に雇用された。(48)

元町デパートと三越の交渉(49)

元町デパートの破たんは、開業から約半年後の一九二六年三月末頃同店が競売されるという報道で明らかになった。(50) テナントはまだ残つて経営を続けていたので混乱が続いたようだ。(51)

三越社員の回顧によると、元町デパートとの交渉は次のようなものだった。一九二六年七月六日、破たんした元町デパートの建物を継承して三越が神戸分店を開業した。その三か月前から元町デパートの井上彌太郎と三越大阪支店次長の竹内養次(52)が互いの弁護士を入れて交渉した。「當時は整理屋が割込んで事態紛糾、飛んでもない手形債権などが陸續飛び出して来る始末に、最後の整理工作を買つて出た三越は、この應酬には一時相當手古摺つた」。債権者が「百三十何人だつたかと記憶しますが、之等の債権を或は五割三分とか、或は七割とかに落着かせまして、出品者との債権関係や立退料問題などを安全に片付ける迄に三ヶ月を要したのです」。同社員によると、三越の努力もさることながら「井上(彌太郎)さんが群議を斥けて、三越一本槍で整理方針に向かはれた點は、大いに果敢且つ明断であつたと思ひます」と回想している。(53)

具体的に約一〇〇万円の債務をどのように処理したかは不明である

が、六年後の一九三二年七月この問題が『大阪毎日新聞』⁽⁵⁴⁾に出た。それによると、まず三越が元町デパートに九十六万円融通し、さらに同社の建物を年十二万円（半年六万円）で借り受けることにした。九十六万円のうち、五十五万円は農工銀行の肩代わり、二十六万円はデパートの建物を売渡担保とし、残り十五万円は家賃の前渡しとした。当時の契約によれば、利率は年八分、期限は五ヶ年であった。

これを元町デパートでは、受取家賃年十二万円の半分（六万円）を利息の支払いにあて、もう半分（六万円）を元利金の返済にあてることにした。（実際六年後には、債務残額が七〇余万円となっていたという）。

このまま三越との契約が続けば良かったのだが、三越側はちょうど分・支店政策を進めている時期で、建物の所有権を取得するか、家賃を下げてもらうかを決断しようとしていた。そこで、デパートの建物売渡担保権を行使して、元町デパートに債務返済を迫り、法的措置にまで踏み切っていたのである。⁽⁵⁶⁾

反百貨店運動が盛り上がっていた時期なので、新聞ネタになったものと思われる。記事には、同社の井上彌太郎が「大資本の横暴だ」と次のように語っている。⁽⁵⁷⁾

もともとわれわれ貧弱なものが七十万円といふ大金の調達が出来ぬ元を見込んでの話で、私の方としては家賃として受取る年十二万円も利息の支拂や元金の返済にもあて、会社としては一文も

受取らず、ために会社は無配當の上に重役の手當など全然なくひたすら債務完済を希望してゐたのです、

最近三越側から債務の返済を求めて来たので、當方としては契約當時の債務は更改するといふ約束もあつたので極力更改を希望したのですがそれも聞入れられず、二、三日前ついひ物別れとなつたのでした。當方としては積極的に争ふ気は全然ありません。

一方、三越の代理人弁護士は「全く極秘に附してゐたのにどうしてあなた（新聞社引用者）の方に知れたのか不思議でなりません」と語っている。ここから、同社が三越からの家賃収入で債務の返済をしてきたこと、今回三越が五年ごとの契約更改に応じず、債務返済を求めたことがわかる。

ところで、同社の『営業報告書』が第十三回（一九三〇年上期）十七回（一九三二年上期）の五回分判明している⁽⁵⁸⁾ので、以下それらにもとづいて見ていきたい。新聞報道の裏付けがとれると思うからである。

まず、第十三回（一九三〇年上期）『営業報告書』によると、資金一〇〇万円、収入は建物賃貸料（半期分）六万円と雑益約二円だけで、六万円は十七回まで続いている。これは（前出の）三越からの建物賃貸料と思われる。支出は支払利息四万八、〇〇〇円で、十五回まで続いている（十六回三万八二〇円、十七回二万九、九三二円）。当期純利益は二、九三五円なので、ここから、営業はせず、建物賃貸収

入を債務の支払いに充てていることがわかる。

次に、同社の資産として土地が四十八万九、六〇七円、建物が八十九万六、一八一円と評価されている。一方で、借入金八十一万一三三円、支払手形十九万四、六六六円とある。十七回（一九三三年上期）には借入金は七十三万一、九六〇円だけになっている。ここから同社の借金は約七〇万円で新聞報道とおおよそ合致する。

最後に株主構成である。総株数二万株、株主五七名で、筆頭株主が三越の竹内藁次九、七一〇株（全体の約四九％）、次いで中橋久吉三、九一〇株（約二〇％）、井上彌太郎一、二八〇株（約六％）、共立合資会社（代表者石井繁治郎）一、〇〇〇株（同五％）である。つまり、四人で全体の約八〇％を所有しているのである。特に三越の竹内が約半分所有しており、これは第十七期になっても変わらない。実質的に同社は三越の手の内にあつたのであろう。以下、五五〇〜一〇〇株所有している株主は十六名で、井上姓が七名いる。ここから、同社の経営は三越にゆだねられ、井上同族が株主として名前を残し、借金を返済しながらも同社の建物資産を守ろうとしていたことが読み取れる。

三越の『営業報告書』によると、「昭和十（一九三五）年二月十八日神戸市元町通六丁目四拾番地當社神戸支店敷地五百參拾壹坪七合壹勺ヲ地上物件ト共ニ株式会社元町デパートメントストアヨリ買入レ本日所有權移轉ノ登記ヲ了ス」とある。結局三越は「買入レ」により訴訟沙汰を避けたのである。

むすびにかえて

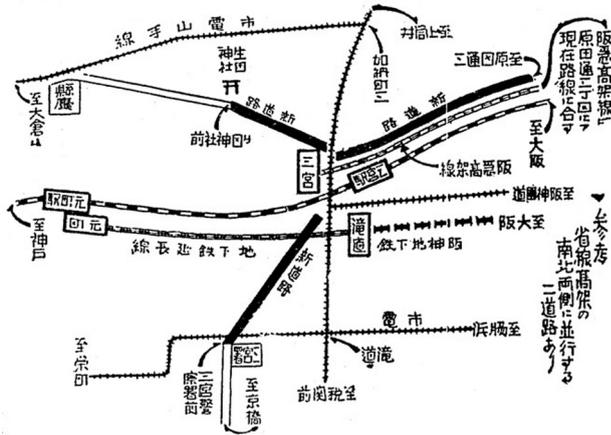
これまで、神戸の百貨店（デパート）三類型、元町デパートの創立と経営上の問題点、破たん後の三越との借金交渉などを見てきた。元町デパートの経営上の問題は種々あつたのだが、小稿では元町通商店街の中小売店との競争に大型店として優位に立つことができなかったことが一番の原因であると主張した。それほど、元町の中小売店は手ごわい存在であつた。その背景には、東京大阪と比較した場合の相対的な商圏人口の少なさや、初物好きの港町神戸の顧客特性もあつたと思われる。

ところで、一九三五（昭和一〇）年頃になると、商業の中心は元町から三宮へと東進していく。その原因を『百貨店新聞』は次のように報道している。⁶⁰

試みに神戸市交通図を見るなれば、阪神、省線、阪急、国道等々大阪神戸間をつなぐ省線の開通以来、しほや（塩屋）、須磨、鷹取、兵庫方面の住民が頗る便利に市中のどこへでも出られる様になつた。それまでは一寸市中に買物に出るにも汽車に乗れば卅分位かゝつて、一つ一つの停車場で二分三分と停車し、それに回数も少いといふのだからせいぜい兵庫かかづべ（神戸）あたりで用を足して了ふ。

之がわずか十分で三宮、灘辺りまで来られる様になつたのだから所謂『都心東道』の現象も無理はない、やがて阪急もさんのみ

図5. 三宮駅を中心とした鉄道・道路の新線計画(1935年1月)



出所：「三宮駅を中心に放射する交通の大動脈」『神戸新聞』
1935年1月5日付、神戸大学「新聞記事文庫」web版より。

当時の交通事情を見ると図五の通りであり、三宮を中心に鉄道・道路の新線計画が着々と進んでいることが見てとれる。阪神三宮駅のターミナル・ビルにはそ

そして三越が最も不利な状態に陥ることになる。

や(三宮)乗入れが完成すれば尚更である。阪神の(三宮から元町への)延長も寧ろ西部へ手を伸ばして顧客を呼び寄せると云ふ意味に大きな山があるだらう。
斯ふして行くとも東からの人と西からの客が最大限の便宜的膨着点は三の宮を中心とする所に落ちつくであらうことは容易に考へられる。即ち現在よりも更に幾分東へ寄つた所が将来の神戸市の心臓部になるといふ説である。
そうなれば恵まれるのがさ(十合)だ。大丸も悪くない。

注

「(1) 山本武利・西沢保編『百貨店の文化史』(世界思想社、一九九九年)を一つの到達点として以後十数年のうちに数多くの研究が出ている。最近でも、商業史・経営史系で、末田智樹「昭和初頭静岡市への松坂屋支店誘致と反百貨店運動」(『人文学部研究論集』第三五号、中部大学、二〇一六年一月)、加藤諭「戦前期東北の百貨店業形成—藤崎を事例に」(荒武賢「朗編著『東北からみえる近世・近現代』岩田書院、二〇一六年三月)、谷内正往「戦前、三重県津市大門百貨店の創立」(『大阪商業大学商業史博物館紀要』第十六号、二〇一五年一〇月)、武居奈緒子「大規模呉服商の流通革新と進化—三井越後屋における商品仕入体制の変遷—千倉書房、二〇一四年)等があり、文化史系では、神野由紀「百貨店で「趣味」を買つ—大衆消費文化の近代」(吉川弘文館、二〇一五年)等が出ている。さらに、『国立歴史民俗博物館研究報告』(第一九七号、二〇一六年二月)には百貨店史の特集が組まれており、論文が多数掲載されている。

(2) 例えば、昭和初期の白木屋大阪支店閉鎖の場合、他店との競争もさることながら「アパート経営」(委託仕入)に依存したことが原因であった。また白木屋神戸支店を引き払うのに当時の金額で十六万円がかつた(谷内正往「戦前大阪の鉄道とアパート」東方出版、二〇一四年、一五七—一五九頁)。東京では松菱百貨店の事例がある(滋賀県彦根や埼玉県川口のマルビシ百貨店とは無関係と思われる)。大正末年頃東京丸ビルから大丸が撤退したのをうけて松菱百貨店が入居した。し

- かかわらずか一年で閉店した（『丸菱百貨店は何故蹉跌したか』『商店界』第七卷第六号、一九二七年六月）。ほかに一九三五年頃の『百貨店新聞』には東京美松百貨店の閉鎖記事が掲載されている（『百貨店新聞』第二七五号、一九三五年一月二日付、第二面）。
- (3) その先駆は末田智樹「立地展開の分析からみた創設期阪急百貨店の経営―昭和戦前期における百貨店業態の新展開」（『人文科学研究集』第十四号、中部大学、二〇〇五年七月）である。後に末田智樹『日本百貨店業成立史―企業家の革新と経営組織の確立』ミネルヴァ書房、二〇一〇年、第五章に所収。
- (4) 前掲『戦前大阪の鉄道とデパート』。
- (5) もちろん、三越大阪支店、松坂屋大阪支店のように鉄道駅に店舗しなかつた事例もある。三越は南海難波駅や阪神三宮駅に店舗を計画していたことが当時の新聞記事等でわかるが、松坂屋については不明である。
- (6) 現代については、田村正紀『立地創造』（白桃書房、二〇〇八年）、川端基夫『立地ウォース（改訂版）』（新評論、二〇一三年）など精力的な研究が多い。
- (7) 元町デパートについては、岩田照彦氏のとまとった紹介記事がある（神戸元町商店街HP、<http://www.kobe-motomachi.or.jp/cont08/cont08.htm>の「history」二〇一一年六月・九月分）。なお「history」には二〇〇〇年から現在に至るまで月一ペースで元町関連の記事が掲載されている。まとまったものとして、岩田照彦『元町夢街道』（こうべ元町一三〇年実行委員会、二〇〇四年）がある。
- (8) 『新修 神戸市史（産業経済編Ⅲ）』神戸市、二〇〇三年、四一七頁。他に、寺岡實『タワーの時代―大阪神戸地域経済史』（信山社、二〇一一年、第三章）も参照した。
- (9) 一般には「勤工場」というが、関西では勤商場と呼んだ。明治の殖産興業期に勤工場は発明品や産業生産品などを当時では珍しい売り方をして人気を集めた。すなわち、一つの会場に複数の商店を集めて、
- 下足入場、陳列・定価販売を行ったのである。後に登場する百貨店との違いは、同じような売り方でありながら、建物や商品の品揃え、販売促進等において勤工場が安物の代名詞になっていくのに対して、百貨店は高級なイメージを定着させていくところにある（初田亨『百貨店の誕生』三省堂、一九九三年、二一六頁）。東京を中心とした勤工場の研究として、鈴木英雄『勤工場の研究―明治文化とのかかわり』（創英社〈三省堂書店〉、二〇〇一年）等がある。本文の神戸の事例は、勤工場から百貨店への交代を最も象徴している（鈴木安昭『昭和初期の小売商問題』日本経済新聞社、一九八〇年、一六五頁）。
- (10) もともと大丸、そごうなど呉服の著名店は明治期から神戸に出張所・支店を持っていた（同前、四一四―四一七頁）。高島屋は呉服店時代（一九〇一年）に神戸出張所を開設したが、一九二六年大阪長堀店開設と同時に閉鎖した（『神戸と百貨店』村上静人編『そごう』百貨店新聞社出版部、一九四二年、六三頁）。
- (11) 狩野弘一編『日本百貨店総覧（昭和二年版）』百貨店新聞社、一九三六年、二八三頁。
- (12) 大橋富一郎編『躍進神戸三越』日本百貨店通信社、一九三九年、二〇頁。
- (13) 株式会社そごう社長室広報室編『株式会社そごう社史』同社、一九六九年、一〇二―一〇三頁。
- (14) 同前、一〇三頁。
- (15) 同前、一〇三頁。
- (16) 前掲『新修 神戸市史（産業経済編Ⅲ）』三八四頁。ほかに神戸瓦斯が市民のガスに対する不安感を払しょくするために販売した「ガス焼き」（ガスを使って製造した食品）も好評を博した。
- (17) 狩野勝三編『経営』第五卷第七号、一九三六年七月、商店経営研究所、ページなし。写真には記事がついていて「市の中心地東西に亘る一丁目から六丁目迄の幅員四間乃至五間の無勾配アスファルト舗装道路商店街、流石に代表的名声を有する文に顧客の範囲広く上中流、サ

ラリーマンを主とし、在住外人はもとより観光客を吸収する。小売店舗数二六五、其他一丁目、六丁目に存在する百貨店二、カフェー、バー、喫茶店等二一、を算し散策にも適し、殊に近代的色彩豊富な喫茶店の増加等により見て、慰安場所を兼ねる傾向多く、一般的にモダン化しつつある。小売店別で見ると、土地柄洋品店が断然多く一九を算へ洋服、靴皮革製品及び呉服屋さんがこれに次ぐ。共同施設としては聯合賣出し、大正十五年の設備になる紅白鈴蘭照明、塵埃を防ぐ為の月五、六回の除塵油の散布等があり、尚平素正午より、一時半頃迄出盛るオフィス・マン達の所謂『元ブラ』散策の夏季炎天の候に處する為の共同日履設備等を将来の要望として居る」とある。「共同日履設備」とは今でいうアーケードのことだろうか。

(18) 『扇港商業地帯の中枢に出現せる一大権威 元町デパートメントストア』『神戸新聞』一九二五年一月三〇日付、第五面。

(19) 新会社を設立するということが。

(20) 『株式会社元町デパートメントストア営業報告書』第十三回(一九三〇年上期)〜十七回(一九三三年上期)の各株主名簿。

(21) 『明治大正昭和神戸人名録』日本図書センター、一九八九年(一九二五〜大正十四)年、二一三頁。底本は『日本紳士録(大正十一年)』。一九三六(昭和十一年)になると、井上高温(井上油店合資会社代表、元町デパートメントストア株式会社取締役、神戸、元、七ノ一三、電話元四〇〇三六(三))だけになる(同書、八頁)。座談会の油店はこれである。

(22) 元町地域PR委員会編『こうべ元町一〇〇年』一九七一年一〇月、ページなし。その後に次の会話が続く。宮崎「何階建ての建物でした。」野網「現在のままです。その元町デパートは、大正十五年に三越になったのです。」宮崎「元町デパートの前は何ですか。」平尾「散髪屋とか、洋家具屋です。」

(23) 当時、神戸の勤商場については不明だが、大阪市役所商工課の調査によると、大阪の勤商場は全部で六つあり計画中のものが一つあつ

た。勤商場の入居商店数は四〜七店、十二、十八店、最大で三二店であり、雑貨店(十三店)、袋物店(九店)、文房具店(九店)など日用品が中心であった。大阪の勤商場は以前ほど隆盛でないという。その理由として「(一)設立の当時は相富新奇なる営業として、一般に好奇心を以て迎へられたるも、近來厭かれて顧みられざるに至れる事、(二)勤商場に比し比較的高級にして且つ商品種類多様に互れるデパートメントストアの如く、積極的営業政策を採らず、常に消極的政策を採り、廣告等は殆んど利用せざる事等に起因する」という(大阪市に於ける勤商場)『大阪市商工時報』大阪市役所商工課、一九二二年十二月。

(24) 『六層樓の元町デパート』『神戸又新日報』一九二五年一〇月十二日付、第六面。以下、デパートの設備、売場配置については同記事による。

(25) 同じ新聞の十七日付には、全二面にわたって元町デパート竣工祝いで協賛企業の広告が掲載され、そこに元町デパートの全景写真と設備概要が掲載されている。これには、総建坪数が「約三千坪」と記載されている(『神戸又新日報』一九二五年一〇月十七日付、第四面)。

(26) 前掲『六層樓の元町デパート』。

(27) 『神戸新聞』一九二五年一〇月三日付、第一〇面。

(28) 『神戸又新日報』一九二六年三月十五日付、第一面。

(29) 『神戸又新日報』一九二六年三月二六日付、第五面。

(30) 『神戸又新日報』一九二六年三月二一日付、第三面。

(31) 宮川節郎「神戸元町デパートメントストア失敗記」『商店界』第七卷第六号、一九二七年六月、五〇―五三頁。

(32) 同前、五一―五三頁。

(33) 開業二日目に同店屋上から青年が飛び降り、通行中の婦人の肩に落ちた。青年は死亡し婦人も重傷を負い、後に死亡した。『神戸又新日報』一九二五年一〇月十九日付、第七面)および『神戸新聞』一九二五年一〇月十九日付、第六面、一〇月二十五日付、第八面)参照。

- (34) この時期、下足預かりは各店廃止の方向にあった。詳細は、前掲『戦前大阪の鉄道とデパート』第一章第四節「戦前三越の下足問題」を参照のこと。
- (35) 同じ元町六丁目小橋屋が六階建鉄筋コンクリートで改築している。品揃えは「百貨店式に呉服、太物、洋雑貨、小間物、食料品店、家庭用品、玩具などを充実して」いるという(「新装の小橋屋」『神戸新聞』一九二五年一月二七日付、第八面)。呉服太物があつて、他に食料品、雑貨があるならば、客は小橋屋と元町デパートを比較対照したであらう。
- (36) 加藤恭太郎「神戸三越の経営に就いて」大橋富一編『躍進 神戸三越』日本百貨店通信社、一九三九年、一三〇―一三二頁。
- (37) 一九三五年頃の元町商店街を神戸商科大学教授平井泰太郎氏が学生を動員して調査している。元町通りに調査カード三〇三枚配布し約九五%の回収率を得た。そこから判明したのは、元町各商店と神戸三百貨店(そごう、大丸、三越)の売場面積がそれぞれ約六、〇〇〇坪(約一万九、八〇〇㎡)で同等であること、商店は男子店員が約八割で、百貨店は男女半々であること、電話の数は商店が三三九個で百貨店が二七個であることである。特に「元町は五年間に四割以上が変化しつつある」という(『大阪毎日新聞』一九三五年二月二日付、三日付、神戸大学「新聞記事文庫」web版による)。
- (38) 大橋富一編『躍進 神戸三越』日本百貨店通信社、一九三九年、九一頁。
- (39) 同前。
- (40) 前史は神戸出張所であつた。以下の記述は「三越神戸支店年譜」(大橋富一編『躍進 神戸三越』日本百貨店通信社、一九三九年、二六一―二七頁)による。
- (41) 同前、十六頁。
- (42) 主な商品は「メリヤス肌着、洋傘、日傘、子供服、同下着、履物、足袋、学用品、紙文具類、陶漆器、荒物、金物等の日用雑貨を始め、米、石炭、雑穀、野菜、果実、佃煮、乾物類、牛豚肉、兎肉、臺所諸用品、家具類等」であつた(同前、二〇頁)。
- (43) 前掲『躍進 神戸三越』三三―三五頁。
- (44) 戦後は、高度経済成長期を経て一九八四年規模を縮小して元町三丁目店舗を移転する(『株式会社三越一〇〇年の記録』同社、二〇〇五年、二五六頁)。
- (45) 能勢昌雄(談)「経営目標を店格向上へ」前掲『躍進 神戸三越』前の方、ページなし。
- (46) 前掲『躍進 神戸三越』一三七頁。
- (47) 元社員の回顧によると、「元来支店の経営は非常に困難」だという。「第一に手持ち商品の最高額に制限があるから、総ゆる商品を無闇に持つ訳には行かない」。そうすると客から品揃えが悪いと非難される。それでは「売れ行きが悪い商品を思切つて処分すると損益勘定に致命的打撃を受ける。然しそいつて不良品を処分せないと、新品の採り入れに不自由となつて来て、商品回転鈍く、売上高獲得上と同業者競争上、商品の新鮮味に於て多大の遜色がある」。さらに経費切りつめ「節約第一主義」のため、接客サービス、店舗の改装にお金がかかられず「万事不自由と窮屈」から逃れられないという(里田源三郎「神戸時代の思ひ出」(同前、七頁))。
- (48) 同前、十四頁。
- (49) 鴨井丁三「元町デパート跡に分店が誕生する迄」同前、五十五頁。
- (50) 新聞報道によると「三十五萬圓の借金が拂われず、神戸市元町六丁目元町デパートメントストアは既記の通り、去る本月四日(一九二六年三月四日)引用者)神戸市三宮町一丁目神戸信託株式会社から元利再建三十五萬圓八千七百十五圓のかたとして、神戸区裁判所に競売を申し立てられ、三雲判事係りで審理されてゐたが、遂に此程決定を見、来る四月十二日午前十時より愈々同裁判所で執達吏の手により競売に附せられる事となつた。因に同建物の最低競売額は五十四萬圓である」と(『神戸又新日報』一九二六年三月三〇日付、第三面)。

- (51) 「元町デパートは破産の外あるまい 今や全く出品人の監理に置かれ三越も逃腰となる」『大阪毎日新聞』一九二六年四月二十五日付、神戸大学「新聞記事文庫」web版による。
- (52) 竹内はその後大阪支店長に昇進するのだが「怪しげな暗い人々に患ひされて、晩年不幸に終つた」という(前掲『躍進 神戸三越』四〇頁)。竹内については『輝く三越―開設三十周年記念』日本百貨店通信社、一九三七年、七〇―七二頁に詳しい。
- (53) 続けて「井上さんは今尚ほ元気で、三越の筋向ひに油屋を経営してお旺んであります。また、當時井上側の法廷代理人たる弁護士瀬戸本氏の公平な手裁きをも解決を促進する上において、大きい功績であつたことを附け加へて申して置きませう」と述べている(鴨井丁三「元町デパート跡に分店が誕生する迄」大橋富一編『躍進 神戸三越』日本百貨店通信社、一九三九年、五五頁)。
- (54) 「三越神戸支店の建物を繞る争ひ」『大阪毎日新聞』一九三二年七月八日付、第十一面。以下の記述は同記事による。
- (55) これは一九二六年九月経営トップに立った小田久太郎の「一県一店主義」にもとづく。一九二八年三越神戸分店を支店に昇格させ、一九二九年大連、京城出張所を支店に昇格させた。一九三〇年銀座、新宿両支店を新築拡張し、次いで金沢(一九三〇年)、高松(一九三一年)、札幌(一九三二年)、仙台(一九三三年)と、わずか数年間に支店網を全国に延ばしたのである(前掲『戦前大阪の鉄道とデパート』四一―四二頁)。
- (56) 一九三二年七月八日三越が元町デパートを相手取り「土地建物所有権移転登記手続、訴額七十七万二、九五九円三三銭請求」の訴えを神戸地方裁判所に起こした。「原告会社は昨年五月二十一日現在三越神戸支店の営業所となつてゐる元町六丁目の街角二百九十二坪の土地と鉄筋コンクリート六階建の建物と九筆の附属建物を被告会社から被告が神戸農工銀行に對する五十七萬二千九百五十九圓三十一銭の債務負債づきのまゝ二十萬圓で買受け更にその支拂ひ方法は現金であるか、ま

- たは三越が被告に貸付けてゐる二十六萬圓のうち對等額相殺の方法にするかはすべて三越の方に委せるとの契約であつたので、原告は去る三月二十二日對等相殺の方法によつてその代金を支拂つた。従つて右の土地建物などの所有権は買賣契約の約旨により原告に移轉するものなるにかゝらず、被告はこれが登記手続をしないからやむなく本訴を起こしたといふのが三越の主張である」。この元町デパート側は顧問弁護士の瀬戸本静麿が「雙方の主張または交渉の内容などは非常に複雑であり、一應訴状を見ねば何ともお話するわけにはゆかぬが、三越が訴訟を起こした以上、私の方でも無論應訴して飽くまで抗争し裁判所の公正な判断によつて白黒をわけて貰ふつもりです」と述べた(「三越と元町デパート 土地建物争ひ」『大阪朝日新聞』神戸版、一九三二年七月九日付、第十五面)。
- (57) 前掲「三越神戸支店の建物を繞る争ひ」。
- (58) 『株式会社元町デパートメントストア営業報告書』第十三回(一九三〇年上期)―十七回(一九三三年上期)。数値は円未満を切り捨てて表した。
- (59) 『三越営業報告書』第六十期(一九三四年下期)、一九三五年二月二八日、二―三頁。一九三四年九月二日神戸支店長竹内養次が辞任し、同月二十一日に室戸台風が神戸を襲つた。
- (60) 「都心は移る 神戸の巻」『百貨店新聞』第二六七号、一九三五年八月二六日付、第五面。三越については「古ぼけた建物、イビツに曲つたエレベーターは如何に暖簾の強みがあると言つても経営者の苦心は今後思ひやられる。店舗と場所が百貨店界から取り残される事は大阪支店の場合と同じかもしれないが、小さい一神戸市では之と事情が大分異なる」と神戸の商圏人口が少ないことを不安視している(「都心は移る 神戸の巻」『百貨店新聞』第二六八号、一九三五年九月二日付、第三面)。
- (61) 神戸そこうについては、別稿を予定している。

